神父アントアンの棕櫚樹

第十九回雜誌部委員　牛原冬至生譯

（オールドリッチ）

著者小引。トーマス、ベーレイ、オールドリッチは一千八百三十六年十一月十一日米國はニューハンプシアイア洲のポーツマスに生れた。彼が始めて文壇に名を出したのは彼が二十一歳の時である。又此の人の作は宮森麻太郎氏の編纂現代七英文學大家といふ小冊子のうちにも二篇出て居るので誰れでも疾うに讀んで知つて居る事だと信ずる。併しあれに出て居る二篇は多少日本の現代の學生などの趣味をも考へて其の上で撰んだものではないかと察せられる。あれは決してオールドリッチの短篇の代表作とは見られない。詩人として彼の技倆に就ては自分は讀んで居ないから何とも云へない。併し小說家としての彼は浪曼的で輕快な（惡く云へば輕薄な）所謂潮士に新生したアメリカニズムを其の絢爛な筆致を以て万遍なく表出して居る所にあるだらうと思ふ。淺野文學士の英文學史には Marjorie Daw などが最優れた作といふやうに書いてあつたと思ふ。此の作などが最能く作者のケレンを代表して居る作で、ケレンも是程ケレン其者とまで行けば無邪氣で中々面白い。其他 Sea Turn: Two Bites at A cherry, Queen of Sheba 等は此作者の代表作と見らるべきものだと信ずる。勿論此等の作とても現今の我文壇の諸公の覗つて居るやうな所とは隨分覗所が違つて居るので矢張蕉文藝位な所かも知るぬ。けれども閑潰し位に讀むのには極適當な讀本である。併し前以て斷つて置くことは、かつがれるのが嫌やの人は不可讀、玆に譯出するものは勿論代表作といふ程のものでもなく譯するのに手頃だから撰んだといふまでの事でかつがれる心配もない。（譯者）

レベーに程近い、ニューオールリアンズの古い佛蘭西公教會から間もない所に一本の綺麗な棗椶櫚樹がある。高さは三丈もあつて其の廣い葉は如何にも渡り物でございますといふ風に蔭を成して居るが其の凸凹した幹は其の本國の土から其の生々した勢力を吸收してゞも居るやうである。

サー、チャールス、リエルは彼の『米國再遊記』といふ書物のうちに次のやうな事を書いて居る。プリンチアといふ人の話に依ると、此の椶櫚樹はもう七八十年になる。何故かといふとアントアンといふ羅馬加特力の僧侶が亡くなつてからもう二十年になるのに此の椶櫚樹は彼が若年の時に植ゑたのだといふ。而して此の人の遺言で此處の僧職を襲ふものは誰れでも此の椶櫚樹には觸つてはいけない。もう觸つたものがあれば職を失はねばならぬといふことになつて居たさうである。

サー、チャールス、リエルはもつと此のアントアンといふ僧侶の事に就て知つて見たくなつて、昔から此の街の塲末に住んで居る佛蘭西人に尋ねて廻つたが、アントアンは其晩年に於て非常に憔悴して、丁度木乃伊見たやうに痩せこけて街をあちらこちらと歩き廻つたが、遂其影を失つて了つた。而し旅人が彼の慘憺な最後を發見したと、これがアントアンに就て一般に人の知つて居る所である。

一千八百六十一年の夏、ニューオルリアンズはまだ叛徒の掌中に陷つて居た時分、私はバーヂニア洲のアレキサンドリアでルイジアナの人でブロンドウといふ婦人に遇つた事がある。其の人が私に神父アントアンの生涯及び其の不思議な棗椶櫚樹の話の材料を私に與へた。若しも私の話を讀者がもう古臭いものだと云ふならば、それは私がブロンドウ嬢のやうに黑豹のシルケットの笹緣を取つた衣裳を着て頸の廻りにレースを捲付けて居ないから、そんな事をいふのだ。私は實際此の物語を話すべき彼の女の眼差と唇と南方の音樂的

の上釣つた調子を持たない。

神父アントワンはまだ若い時分に自分の生命程大事にして居た二人の友達があつた。エミル、ヴェルダンと云ふて此の人の方からも非常にアントワンを愛してゐたが、其の爲めに此の二人は町の人々から不思議に思はれた程で、影の形に添うやうに一人で歩くのは誰れも見たものは無つた。實際二人は勉強も散歩も食事も寢床も一所にして居たのでと、かういふ風にラオアメッタが彼の女の最も美くしい物語をホツカシオの花園に於てクロトレンスびとに聞かせるやうに、ブロンドウ嬢が話し始めた。

アントワンとエミルとは何れも其の頃教會へ入らうとして居た。實際彼等は彼等が生涯の色を變へた或事件の起つた時にはもう大部其の準備も整つて居たのであつた。數月前に太西洋のとある名も知れない島から一人の夫人が彼等の近所へ越して來た。而して夫人は間もなく其の頃十六七になる娘の子を一人殘して死んで了つた。アントワンもエミルも其の夫人の病氣中親切の有つ丈を竭してやつたが、愈夫人が息を引取るといふ段になつて――アングリス(娘の名)の哀れな境遇に同情して御互にアングリスを妹分として保護して行かうといふことに相談が纏つた。

かうして彼等が望みなき熱情との戰は幾月かの間は御互感附かれるやうな事も無くして過き去つた。彼等は彼等が正に取らんとして居る進路の爲めに彼等が戀を結婚といふ考を何の苦もなく排し去つたやうな樣子であつた。彼等はこれまで宗教的思索の沈靜な空氣の中に沒入して、欲望に打克ち、船の中に坐しても微笑んで居るといふ敬虔の情熱より他のものには何物にも動されなかつた。併しそこに金髮の少女、其の大きな碧い眼、其の閑雅な聲音、それが彼等と彼等の天國の憧憬との間に現はれて來た。三人の青年を結び付けた

友情の縁は暗默の中にふつりと切落されて、遂に彼等が御互の蒼褪めた顏の色で御互に切望の物語を讀んだのである。

而して少女は。若しも彼の女が彼等が內心の苦悶を分け得たとするならば彼の女の顏にはそれは現はれなかつた。アルグリスは丁度敎會の牖に現はれる聖者の顏のやうに取濟した風を粧つて居た。唯一度彼等が目角沫を飛ばして何事かを口爭ひして居るのを見た時に、眼を輝かした事のあるばかりで、それでも何氣なく粧うて、裕かな金色の髮の毛の一本も振亂さずに通過ぎて了つた。

Entre or et roux Dju fit ses longs cheveux

とある日の宵の慌しき紛亂にエミルとアングリスとは影を隱した。アントアンを他にしては誰れがそれを心配しやう。實際それはアントアンにとつては非常な打擊、アントアンは自分自身も思ひ焦るる思ひの夫をアングリスに打明けて了つた。驅落をしやうとは今迄も幾度か決心まではした事である。

薄い紙片が彼の祈禱書からヒラ〳〵と彼の足下に落ちた。『怒らないで許してくれ、二人は戀に陷つたものだもの』と其の紙は悲さうに私語いた。

三年間は陰鬱に過去つた。アントアンは既に敎會に入つて望みある人と仰がれて居た。併し彼の顏は蒼褪めて彼の心は幽鬱に滿ちた。彼にとつて生といふものは何も樂しい所を見せなかつたのである。

四年目もかうして暮れた、そこへ外國の消印の附いた手紙が此のうら若い僧に齎らされた。――アングリスより の手紙。アングリスは正に死なうとして居る。彼はそれを許すだらうか。エミルは先年其の遁逃した先の島に猖獗を極めた熱病の餌食となつたとしてある。そしてアングリスも今は其の後を逐はんとしてある。

憐つぽい語を以てアングリスは彼の女が此の世を忘れがたみの綠子の行季の僧院に入るまでの、あだし世の一樹の蔭の宿をばアントアンに依托したい。而して其の手紙は他人の筆蹟でヂャルダンの奥様はかう云つて死んだのだと結んである。而してアングリスの子は已に船に乘つて西方の港へ著かうとしてゐると、さう書いてあつた。

手紙は大暴風雨と難船とに遭つて延著して居た、文字も碌に讀めなかつた。間もなく彼はアングリスの娘を見て泣いた。而しつくゞゝと眺めて見ると娘は丁度彼が戀した母親そのまゝであつた。

彼の幾年か心の中に募つて居た思ひの丈の有つ丈を此の幼い娘に傾けた。娘は彼に取つては古き戀人のアングリスと古き心友のヂャルダンとの化身であつた。

アングリスは母親の作り飾りのない美を承繼いでゐた。少し前方へ屈つた樣子から、顏色から、大きな熱帶的の眼まで母親そつくりで、アントアンの僧衣には何だか調和しなかつた。

一月と過ぎ、二月目になつても娘は遂此の家に馴れなかつた。始中終生れた國の事を思ひ出しては裕かな果實、大きな花葩、海のやうな青空、高い團扇のやうな樹、其の間を分けて行く逃げ水の私語に附て物語つた。アントアンは何ともそれを宥める術を知らなかつた。

時偶泣き飽んでは自棄たさまに小さい家の中を廻つたりすることがある。すると一所に船に載せて連れて來た長い尾の鸚鵡が何時も鹿爪らしく娘の後に尾いて、室から室へと附纏つた。

斯うして一年も經つか經たないうちに娘の頰からは血の氣が褪せ、眼は濕みを失つて、纖弱な身体は前よりも猶痩せて來るやうに思はれた。

醫師に診察を貰つた。併し醫師も衰弱するといふ他に格別是といふ病氣の名をも附けずに醫師の手では癒らない心の病みと云つた。

斯て娘アンドリスは日々に衰へて行つた。もう屋外に出て行くやうな事もなくなつた。遂にアントアンの娘は遂にかうして此の世を辭しさるのだといふ事實を裏み隱すことが出來なくなつて、遂に此の娘を戀するに至つた。

『汝、どうしたら好いといふのかい』とかう尋ねたことがある。

『どうもして戴く事つてないのよ、おとうさま』

娘はアンドリスをおとうさまと呼んで居た。

かくして冬季が過ぎ去つて暖かい春の風に木蘭もオレンヂも花を飾つた。アンドリスは甦るやうに思はれた。花の香を送る椽端に小さい竹榻を持出して棕櫚の葉の風に搖られるやうに娘は椅子を搖動した。

時々娘の心の上に何か重荷でも負はされるのでは無からうかと思ふやうに時々陰鬱になつた。アンドリスはそれを知つて居たが、黙つて何かといふだらうと待つて居た。さうすると或時、

『おとうさま、ねえあの私の生國の宅ではね、青い大空の下に棕櫚の樹が風に戰いて居るのよ。それがまあなつかしいつたら無いんですの、私ね終日こうして棕櫚樹の下に居ると思つてるのよ。好いんでせう、私棕櫚樹が戀しくつて病氣になつちやつたの、ねえ、さうでせう、さうぢやないつて』

『まあ、そんなことつたかな、それぢや其の棕櫚樹のある嶋へ行かうぢやないか』

アンドリスは微笑んだ。

『私今に行つてよ』

それから一週間も經たないうちに蠟燭が娘の旅びを照らす爲めに其の額を足下に立てられた。萬事休矣。もうアントアンの心も空となつた。死はも一人のエミルで、新しいアングリスを彼の手から奪去つた。彼は萎み枯れる花を如何ともすることは出來なかつた。

アントアンは庭のうちに淺く土を返して奥津城を定め新しい芝土を此のアイドルの上に被せた。

春の日の靜かに暮れて行く夕暮なとには、彼は指を新禱書の間に入れたまゝ永く此の芝土の上に坐したこともあつた。夏は涼しき彼誰の木蔭に又は夜陰にも比の奥津城の廻を離れなかつた。

或日の朝、彼は其の芝土の頂から玉のやうな綠の芽生か出たのに氣が附いた、でも始めのうちはそれを何とも思はなかつた。併しそれから高い幹が出て、それか今迄見たこともない奇らしいものなので注意をしてそれを撿べて見た。

眞直で、上品で、綺麗な樹！それが黃昏の薰風にゆらゆらと搖れる態は丁度アングリスか庭のうちに立つてゐるやうに思はれた。

アントアンは其の纖弱な幹にどんな色の花を開くだらうか、白か赤か金色かと想像して樂んでゐた。ある日曜日の朝、一人の旅人らしい、色の黑い、日に焦けた水夫體の男が、庭の柵に凭かゝつて、庭のうちをぶらぶら散步してゐるアントアンに云つた。

『何ていきな棘棕櫚樹でせう』

『何に？』

『これが棕櫚樹かね』

『い、棕櫚ですとも、一体、旦那、此の樹はこゝいらのやうな寒い所には生へないものだがね』

『あゝ神様（モンシユー）』とこれ丈は聲を揃して云つたが後は心のうちで『これをた與へに給うたのは我愛する神様』

若しアントアンが此れ迄も此の樹を愛して居たとするならば、これからはそれを崇拜する程になつた。他は水を注げ、肥料を與へて、或時は其の幹を抱いた。エミルもファンソリヌも娘も一身一体の此の樹を思つた。

幾年か過き去つた。棕櫚樹は益生氣を帶びた。そしてアントアンは日々に弱つて行つた。アントアンはもう人生の半を過した。棕櫚樹はまだ若々しい若木であつた。間もなく此の淋しい孤家の近所にもアントアンの家を見下す物々しい煉瓦や化粧漆喰の建物が立てられるやうになつた。市街は日々に廣められ、彼の地面も逐々所望に來るものが少くなかつたが、彼は錢苦のやうに地面にへゝ張り附いて、決して賣らなかつた。

金滿家が金を彼の家の入口に山のやうに積んでも彼はそれを笑つて一向に寄せつけなかつた。彼は時として衣食にも窮したが矢張笑つて寄せつけなかつた。

『サタンよ、退け』微笑みながら彼は何時もかう云つた。

アントアンはもう非常に年が逝つて歩くことも出來なくなつてからは、丁度アラビヤ人がするやうに棕櫚の樹陰に坐つた。それでどんな手剛い相談にかゝわつても一歩も退かなかつた。而して死ぬるまで——

それから後に地主になつたものでも此の樹に何か害を加へたものは必ず產を破つた。

斯んな風で今でもあの道幅の狹い煤けた通に美くしい夢みて居るやうな樹は其の陰路を通る人を恍惚とさせるやうな香はしい呼吸を吐いてゐる。

いで此の棕櫚樹不親切に觸つた手は必ず動かなくなるといふ事である

『それは其の筈ですわね、アングリスさんのポケットから生へ出た棕櫚なんですもの』とガロンドウ嬢は優しく結んだ。

影

春草

夕闇の中に際立つて白い汀を私は夢みる心地に歩いて居る。

天の川の糠星は既に秋の眼を見開いて瞬き、水の面を辷つて來る風は引つ切りなしに流れて地上の夏をぬぐつて行く、其癖海はひつそりと凪いで丁度死の床に臥して居るものを憚るかの樣に磯打つ浪さへ弱々しい。

折々は音もなく寄せ來る浪頭が足を撫でてはさざめき乍ら退き、深くふみこむ足駄にまじる眞砂も煩はしい。

埃の中を汗にまみれて宿に着いたのはつい先刻だ。夕餉をすます迄は落つき兼ぬる心から何も考ふる餘暇が無かつた。

衣を替へて濱邊に立つてはじめて「此所が臼杵だ」と言ふ感がしみ〴〵と起つた。

立渡る靄の薄衣に纏はれ乍ら私を圍繞して居る目新らしい風光を恆と眺めて居ると朧げな言ひ知れぬなつかしさが胸にあふれた。

私の故郷とは五十里をへだてた此地へ來たのは今がはじめてだ、けれど何となく四圍の事物とは舊知のやう